



PISA

IN FOCUS

3



education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

学校の正規の授業以外での授業に投資することは、報われるのか？

- PISA調査で成績の良い国の生徒は、成績の良くない国の生徒よりも、平均して「学校の正規の授業以外での授業」や「自習または宿題」にあまり時間を使っておらず、「学校の正規の授業」に時間を費やしている。
- 「学校以外の先生」による「学校の正規の授業以外での授業」は生徒の間の不平等を悪化させるが、「学校の先生」によるそれは公平性を高める。
- 生徒が理科で良い成績を取ることが重要だと考えた時、教室で過ごす時間が生徒の科学的リテラシーの成績により良い影響を与えている。

最も重要なのは、学習時間の量ではなく、質である。 最も良い職に就くために有名大学に入ろうとする競争において、高校生は、成績をあげるために、学校で学んだ教科について「学校の正規の授業以外での授業」を取ることをよくすすめられる（たとえそれが、スポーツをしたり、音楽のレッスンを受けたり、地域のコミュニティセンターや病院のボランティアをすることのような、放課後の時間を使った他の面白く、興味深い放課後の過ごし方を犠牲にするとしても）。OECD加盟国の生徒は、「学校の正規の授業以外での授業」に平均して週に約2時間半の時間を使っている。ギリシャ、イスラエル、韓国、トルコ、非OECD加盟国のアゼルバイジャン、キルギスタン、カタール、チュニジアでは、生徒はそのような授業に週4時間半以上を費やしている。このような「学校の正規の授業以外での授業」への投資は、報われるのだろうか。

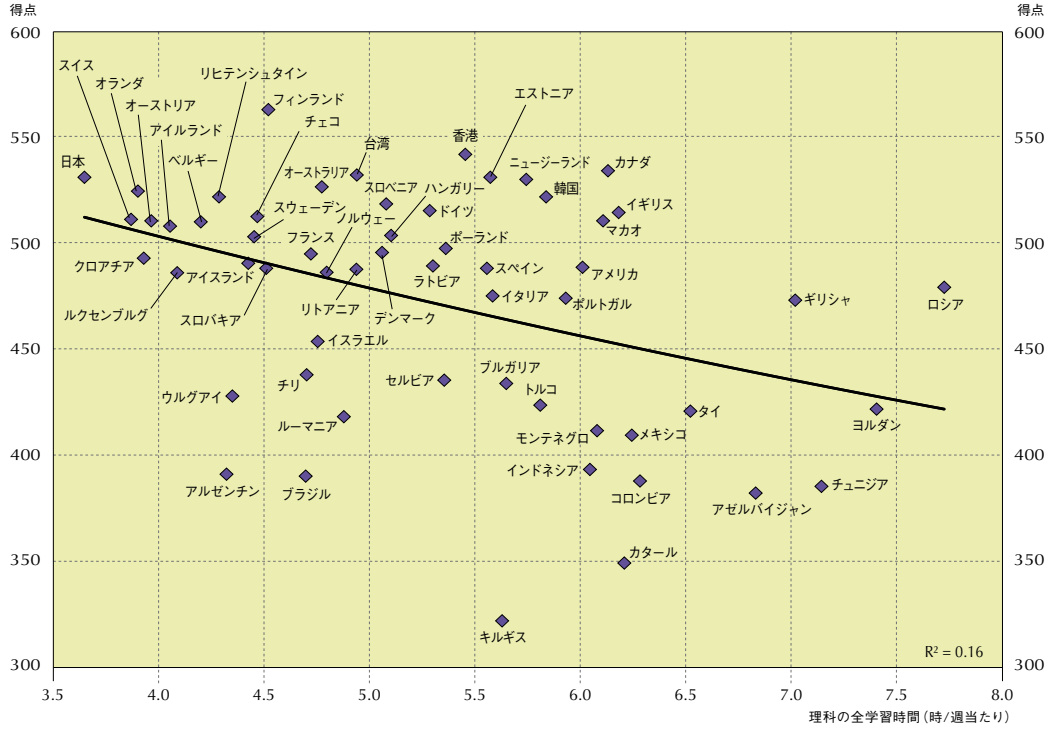
必ずしもそうではない。実際、PISA2006年調査の結果に基づく所見によれば、「学校の正規の授業以外での授業」や「自習または宿題」に費やす学習時間は成績と負の関係がある。もちろんこれは、「学校の正規の授業以外での授業」に通っている生徒が、学校の学習を発展させるためではなく、むしろ補習の目的で通っているためだと考えられる。今なお、世界中では、総学習時間（学校の正規の授業、それ以外の授業、自習や宿題を含む）の高い割合を学校の正規の授業に費やしている場合、生徒の成績が高い傾向が見られる。例えば、オーストラリア、フィンランド、日本、ニュージーランドといった成績の良い国々では、理科の学習の70%以上が学校の正規の授業中に行われている。その上、学習に費やす時間では、これらの国の生徒が良い成績をあげている理由を十分には説明できない。実際、ニュージーランドを除くこれらの国々では、15歳児の理科を学習する時間がOECD加盟国の平均と比べて少なくなっている。同じことが、数学や国語の授業時間についても観察されている。つまり、学習時間の「量」ではなく、学校の授業の「質」が生徒の成績に最も影響を与えているということである。



PISA

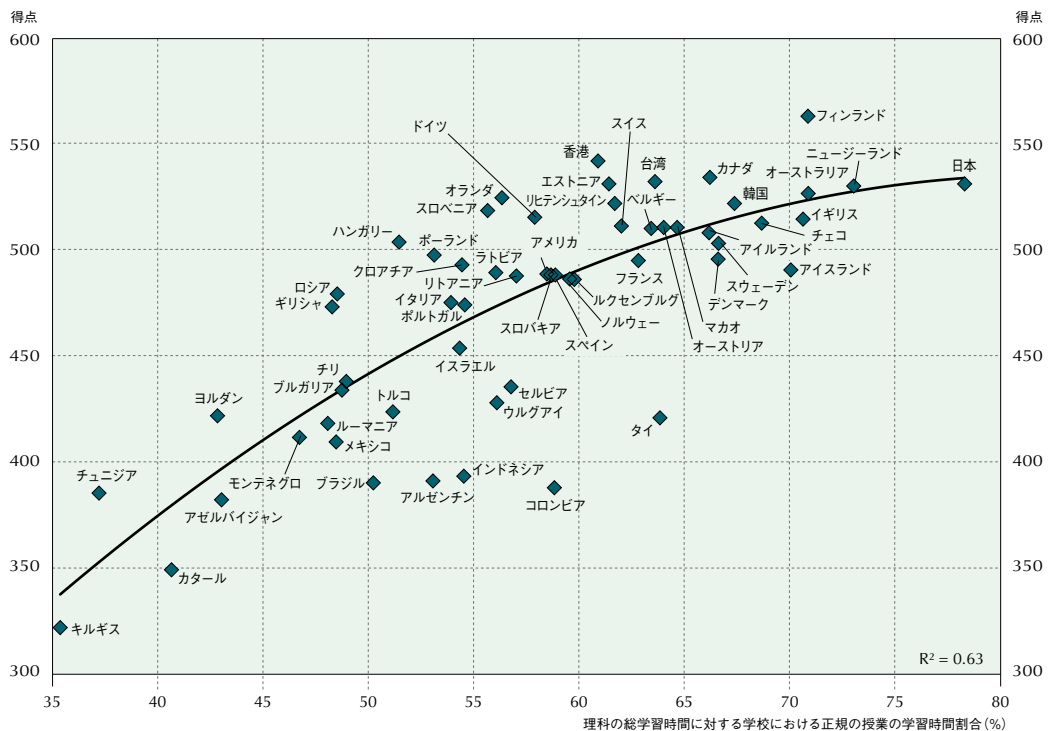
IN FOCUS

科学的リテラシー得点と全学習時間



出典: OECD, PISA 2006 Database.

科学的リテラシー得点と学校における正規の授業の相対的学習時間



出典: OECD, PISA 2006 Database.



「学校の正規の授業以外での授業」の中には、他と比べてより包括的なものもある。「学校の正規の授業以外での授業」の形式や目的は幅広く、多様で、学校の先生が学校で教えるものから学校以外の先生が学校以外の所で行うものまで、また補習的、「遅れを取り戻す」ための授業から発展的なコースまで存在する。PISA調査の結果から、ある種の「学校の正規の授業以外での授業」が良い成績と関係していることが示されているが、それに通うことが社会経済的集団の異なる生徒の間に存在する不平等を弱めたり、強めたりする程度は、国によって様々である。例えば、イタリア、韓国、ポーランド、イギリス、非OECD加盟国・地域のリトアニア、ロシア、台湾では、学校の先生が行う「学校の正規の授業以外での授業」に参加することが、学業成績に対する生徒の社会経済的背景の影響を弱める傾向がある。これは、恵まれない生徒ほど、この種の授業に参加しており、その上、放課後の授業にまったく参加していない生徒よりも成績が良いためである。その一方で、エストニア、アイルランド、韓国、ポーランド、スペイン、トルコ、非OECD加盟国・地域のブルガリア、キルギスタン、ラトビア、ウルグアイ、台湾、香港においては、学校以外の先生が行うグループ授業が、成績に対する社会経済的背景の影響を強めている。これらの国々では、社会経済的に恵まれた生徒の方が頻繁にこの種の授業に通うことができ、さらに放課後の授業にまったく参加していない生徒よりもより高い得点を得ていると考えられる。

「学校の正規の授業以外での授業」の種類別に見た生徒の得点差

学校の先生によるグループ授業				学校以外の先生によるグループ授業		
	この種の授業に参加したときの得点差	生徒の社会経済的背景	学校の社会経済的背景	この種の授業に参加したときの得点差	生徒の社会経済的背景	学校の社会経済的背景
韓国	28	■	■	41	■	■
キルギスタン	25	■	■	37	■	■
イギリス	23	■	■	36	■	■
ブルガリア	20	■	■	28	■	■
ロシア	17	■	■	27	■	■
リトアニア	16	■	■	22	■	■
ポーランド	12	■	■	21	■	■
トルコ	11	■	■	21	■	■
台湾	8	■	■	20	■	■
イタリア	7	■	■	19	■	■
				19	■	■
				17	■	■
				17	■	■
				15	■	■
				14	■	■
				11	■	■

注: この表は、学校の先生または学校以外の先生によるグループ授業に通うことと得点とに正の関連がある国・地域のみを示している。
出典: OECD, PISA 2006 Database.

生徒は、学ぶことの大切さを信じる必要がある。

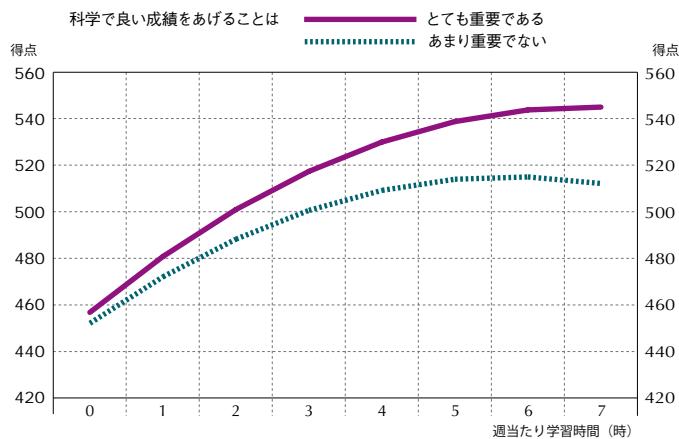
効果的な学習とは、生徒が何を利用できるかだけでなく、生徒が自ら、ある科目内容で良い成績を取ることが重要であると確信する必要がある。PISA2006年調査では、理科で良い成績を取ることが重要であると信じているかどうか、生徒に尋ねている。結果は、生徒がそれを信じる時、信じない生徒よりも、理科の授業に時間をかけるときの成績の上昇が大きいということが最終的に示された。

理科で良い成績を取ることが非常に重要であると回答したOECD加盟国の生徒の間では、学校で理科の正規の授業が1時間増えるごとに、PISA調査の得点が平均して約26点向上している。



理科で良い成績を取ることがあまり重要ではないと回答した生徒の間では、学校で理科の正規の授業が1時間増えるごとに、生徒と学校の社会的・経済的背景を考慮した後での得点が平均して約22点高い。結果として、学校での理科の正規の授業が週5時間以上になると、これらの生徒の間には実質的な得点の違い（20点以上）が生まれる。チェコ、フランス、ギリシャ、アイスランド、ニュージーランド、ポルトガル、スペイン、非OECD加盟国のルーマニアでは、理科の学習に対する考え方によって、さらに大きな差が生じている。理科で良い成績を取ることが非常に重要であると回答したこれらの国々の生徒は、理科で良い成績を取ることがあまり重要でないと回答した生徒に比べ、学校での理科の正規の授業が1時間増えるごとに最低でも6点高い。

理科で良い成績を取ることに対する生徒の考え方から見た、科学的リテラシー得点と学校での理科の正規の授業における学習時間



出典: OECD, PISA 2006 Database.

学習時間、そしてその時間の質を最大限にすることが極めて重要である。何故なら、学習時間の絶対数を増やすことは、必ずしも適切ではないからである。より重要な課題は、特定の科目を学ぶことが何故重要なのかについて、生徒の理解を促進することであり、そしてそれは回りまわって、生徒が学習時間をより効率的に使うのを助けることになる。

結論：学習に関して言えば、最も重要なのは、生徒の学習時間ではなく、学校での教授の質と生徒の学習に対する考え方である。

本稿に関するお問い合わせ先

担当: Francesca Borgonovi (Francesca.Borgonovi@oecd.org), Miyako Ikeda (Miyako.Ikeda@oecd.org) 及び Soojin Park (Soojin.Park@oecd.org)

出典: *Quality Time for Students: Learning In and Out of School*, available at www.oecdbookshop.org

参考サイト:
www.pisa.oecd.org

次回テーマ:
「学校の規律は悪化したのか？」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。